

「漢宮秋」劇の悲劇性

伊藤, 実雪
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494474>

出版情報：比較社会文化研究. 7, pp.1-7, 2000-03. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

「漢宮秋」劇の悲劇性

伊藤実雪

1 はじめに

中国古典演劇の世界においては、金・元代に演劇が開花して以来、近代に至るまで悲劇論は論じられなかった。これは、大部分の作品が最終的に団円に終わってしまい、大団円が劇の収場の常套手段と見なされてきた事が大きな原因の一つである。

しかし、演劇の成立・発展期であった元代においては、団円に終わらない悲劇的結末を迎えるような作品も幾つか存在している。更に、作品自体は後世には伝わっていないものの、脚本の題名から判断すると悲劇的故事を扱った作品と推測されるような劇も少なからず存在する。ゆえに私は、元代においては悲劇はある程度数が存在していたが、元から明への時代の趨勢の中で淘汰され、あるものは滅び、あるものは団円に改編されて伝わった、という見解を取っている¹⁾。

それでは、演劇が大いに流行した元代には、どのような悲劇作品が上演されていたのか。本稿では、元雑劇における悲劇研究の一助として「漢宮秋」劇を取り上げる。

馬致遠作「漢宮秋」劇は、前漢、元帝の時代に匈奴の単于に和蕃公主として嫁いだ王昭君の故事をもとにした

「漢宮秋」劇の悲劇性（伊藤実雪）

戯曲であるが²⁾、『元曲選』百種の第一に置かれ、名作の誉れ高い作品である。一般的に「漢宮秋」は悲劇として位置付けられている。

明以後、傳奇無非喜劇、而元即有悲劇其中。就其存者言之、如漢宮秋、梧桐雨、西蜀夢、火燒介子推、張千替殺妻等、初無所謂先離後合、始困終亨之事也。明以後は、傳奇は全て喜劇であり元にのみ悲劇は存在する。現存の作品について言えば、例えば「漢宮秋」「梧桐雨」「西蜀夢」「火燒介子推」「張千替殺妻」などは、所謂「先離後合」「始困終亨」の事として終っていない。³⁾（王国維「宋元戲曲考」）

《寶娥冤》、《漢宮秋》、《梧桐雨》、《趙氏孤兒》被誉为元人四大悲劇。無論就內容的深刻或藝術的完整看、它們都可稱之為我國古典悲劇史上的豐碑大纛。⁴⁾「寶娥冤」「漢宮秋」「梧桐雨」「趙氏孤兒」は元代劇作家の四大悲劇として称えられる。内容の深刻さや芸術的完成度からして、これらは皆我が国の古典悲劇史上の大きな金字塔と称される。

〔王季思主編『中国十大古典悲劇集』前言⁴⁾〕

本稿では、王昭君故事の系譜を辿りつつ、故事が劇化

されるに当たってどのように悲劇として成立したのかについて検討し、「漢宮秋」劇の悲劇性について考察を試みる。

2 王昭君故事の成立

王昭君が匈奴の呼韓邪単于に嫁した記録は『漢書』元帝本紀・匈奴伝に遡る事ができる。

竟寧元年春正月、匈奴呼韓邪単于來朝。詔曰、匈奴郅支單于、背叛禮義、既伏其辜。呼韓邪單于不忘恩德、鄉慕禮義、復修朝賀之禮、願保塞、傳之無窮、邊垂長無兵革之事。其改元為竟寧。賜單于特詔、掖庭王嬙為閼氏。⁵⁾（『漢書』卷九 元帝本紀）

竟寧元年、単于復入朝。禮賜如初、加衣服錦帛絮、皆倍於黃龍時。単于自言願增漢氏以自親。元帝以後宮良家子王嬙字昭君賜單于。単于驩喜、上書願保塞上谷以西至敦煌、傳之無窮、請罷邊備塞吏卒以休天子人民。⁶⁾（『漢書』卷九十四下 匈奴伝）

また、匈奴伝によれば、匈奴に嫁した後の王昭君は寧胡閼氏と称されて伊屠智牙師という男子を産んだ。建始二年（前三一）に呼韓邪単于が死ぬと、大閼氏との間に

生まれた雕陶莫阜が即位して復株侖若鞮单于となった。匈奴の風習では家系を相続する者が先代の妻を娶る娼婦制が行われていたため、昭君は胡俗に従って復株侖单于の妻となった。单于との間には須卜居次と当于居次という二人の女子が生まれたという。

『漢書』では昭君が单于に嫁いだ事が記録として記され、その詳細な経緯にまでは触れられていないが、『後漢書』になるとかなり具体的な記載が見られる。

昭君字嬭南郡人也。初元帝時以良家子選入掖庭。時呼韓邪来朝。帝勅以宮女五人賜之，昭君入宮数歲不得見御，積悲怨，乃請掖庭令，求行呼韓邪。辞臨大會帝召五女以示之。昭君豊容靚飾，光明漢宮。顧景裴回。竦動左右。帝見大驚，意欲留之，而難於失信，遂與匈奴。生二子。及呼韓邪死，其前閼氏子，代立欲妻之。昭君上書求歸，成帝勅令從胡俗遂復為後单于閼氏。

『後漢書』によれば、昭君は元帝の寵愛がないのを恨んで自ら志願して匈奴に嫁いだとされている。昭君の美貌を目の当たりにした元帝は驚き後悔するが、やむなく嫁がせる事にする。『漢書』の成立は九二年頃、『後漢書』は四四〇年頃で両者には三五〇年程の開きがある。その間に王昭君の史実は徐々にストーリー性を備えていった⁵⁾。後漢の蔡枢の『琴操』、魏の石崇の「王明君詞」は、『漢書』と『後漢書』の間に成立した作品として挙げられる。『琴操』では、自ら志願して匈奴に嫁した昭君に世達という男子が生まれ、单于の死後後継者として即位するが、昭君は自分の子の妻となる事が耐えられずに薬を飲んで自殺するという筋になっており、史実とはかけ離れた展開となっている。我が子との娼婦という設定によって悲劇のヒロインとしての昭君像が一層強調されていると言えよう。

「王明君詞」は比較的早く王昭君故事を題材にした楽府

として位置付けられる。胡地にて娼婦を強いられる恥辱と、死ぬ事もできずにただ生き長らえて祖国を懐かしむほかない悲しい境遇がうたわれている。

梁の呉均の『西京雜記』になると、昭君が匈奴に嫁すまでの経緯が更に詳しく記される。

元帝後宮既多，不得常見，乃使畫工圖形，案圖召幸之。諸宮人皆賂畫工，多者十萬，少者亦不減五萬。獨王嬭不肯，遂不得見。後匈奴入朝，求美人為閼氏。於是上案圖，以昭君行。及去，召見，貌為後宮第一，善應對，舉止嫺雅。帝悔之，而名籍已定。帝重信於外國，故不復更人，乃窮案其事，畫工皆棄市，籍其家資皆巨萬。畫工有杜陵毛延壽，為人形，醜好老少，必得其真；安陵陳敞，新豐劉白、龔寬，並工為牛馬飛鳥衆勢，人形好醜，不逮延壽；下杜陽望亦善畫，尤善布色；樊育亦善布色；同日棄市。京師畫工，於是差稀。⁶⁾

元帝には後宮が大勢いたため、会う事も大変だった。そこで画工に肖像画を描かせ、それをもとに召し出した。宮女たちは皆、画工に賄賂を贈り、多いもので十萬、少ないものでも五萬を下らなかつた。しかし王嬭だけはそのようにしなかつたので、遂に帝に見える事はなかつた。後に匈奴が入朝して閼氏となる美人を求めてきた。そこで帝は肖像画をもとに昭君を行かせる事にした。出発の時に召して会ってみると、その容貌は後宮第一で対応に優れ、身のこなしも優雅だった。帝は後悔したが、既に名簿は定まっていた。帝は外国との信義を重んじたので別の者に変更しなかつた。そしてこの件について調べ、画工は皆処刑してその巨万の資産を没収した。画工の中には杜陵の毛延寿もいたが、彼は肖像画を描かせれば美醜老若、必ず実物通りに描いた。安陵の陳敞や新豐の劉白、龔寬は皆、牛馬飛鳥の様々な様態を

描いたが、肖像画の腕は毛延寿に及ばなかつた。下の陽望も絵に優れ、とりわけ配色に秀でていた。樊育も配色に秀でていたが、彼らも同じ日に処刑された。都の画工はこれによってめっきり少なくなつてしまった。

『西京雜記』の画工のプロットは、昭君が匈奴に嫁す理由として新たに加わり、以後定着していった。そして、賄賂を受け取っていた画工として、当時肖像画の第一人者と目されながら処刑された毛延寿が悪役となつてゆく。このように、王昭君の故事は史実をもとにして徐々に膨らんでゆき、昭君が帝の薄寵を怨んで自ら志願して匈奴に嫁すという『琴操』・『後漢書』の筋は『西京雜記』の画工の姦計というプロットへと変わつてゆくのである。

唐代は六朝時代の古小説に見られるような記録的な短い文章から、伝奇のような本格的な文章が書かれるようになり、小説が発展を遂げた時期でもあつたが、王昭君故事に関しては『西京雜記』の内容を超えるような作品は見られない。韋瓘の『周秦行紀』は牛僧孺が漢の文帝の母、薄太后の廟に迷い込み、戚夫人や王昭君、唐の楊貴妃、齊の潘淑妃と会う話であるが、その中では、昭君が毛延寿の描いた画によつて匈奴に嫁がされ、呼韓邪单于と復株侖单于の妻となつた事が断片的に述べられているに過ぎない⁷⁾。また、作者未詳の『瑠玉集』巻十四、美人篇第一には「王昭」として昭君の話が載せられているが、内容は『西京雜記』を踏襲している⁸⁾。

唐代には小説とは異なるジャンルではあるものの、民間の語り物の中にも昭君の故事は受け継がれてゆく。今世紀初頭に発見された敦煌変文の中には「王昭君変文」(P.二五五三)が存在する。唐、吉師老の「蜀女の昭君変を転ずるを見る」(『全唐詩』巻二十八)、王建の「蛮妓を観る」(『全唐詩』巻十一)などの詩からは王昭君の変文が市井にて語られた事が窺える。変文は主として仏

教の伝道のために用いられた語り物であり、一種の唱導文芸のテクストである⁹⁾。漢代より史実と虚構が入り混じって形成されてきた王昭君の故事が、変文においてどのように描かれているかについて、次に検討を進めたい。

3 「王昭君変文」

「王昭君変文」は中唐の頃に成立したと推定される¹⁰⁾。変文は散文と七言を主とした韻文とを交互に交えた構成になっており、上下二巻に分かれている。上巻末には「上巻立鋪畢、此入下巻」と記されているが¹¹⁾、「鋪」とは唐・五代の頃に絵画を数える単位として用いられた字である。また、本文中の七箇所に見られる散文から韻文への繋ぎの部分には絵画を示しながら韻文をうたう慣用句が付されており、王昭君変文の絵解きとしての性格を窺う事ができる。ただし、上巻の前半部、昭君が漢宮で過ごしていた頃の記載部分は欠損しており、変文は昭君が胡地へ赴く旅路をうたった七言の韻文から始まる。

昭君は漢土に別れを告げて匈奴の地へと向かい、数ヶ月かけて到着する。匈奴の地に至った昭君は大切に扱われ、煙脂皇后の号を賜るものの、異域での風俗習慣の違いから望郷の念は募るばかり。单于是何とか彼女を楽しませようと大規模な狩猟を催したりするが、狩猟の残酷さに心を痛めるばかりで昭君の気分は一向に晴れない。そして故郷を懐かしみ画匠を恨みするうちに遂に病気になる。余命幾許もなくなる。死期を悟った昭君は、自分の亡骸を故郷に埋葬して自分の死を漢王に知らせるよう遺言する。单于是必死に回復を祈るが、その甲斐なく昭君は永眠する。单于是昭君の死を深く悲しみ、彼女の死のために盛大な葬儀を行う。後に、漢の哀帝に遣わされた弔問の使者が訪れる。使者は漢と匈奴の境界にある昭君

の墓、青塚を訪れて祭詞を述べ、変文は終わる。

上巻の欠損によって昭君が单于に嫁すまでの詳細な経緯は不明であるが、変文の中で、

良由畫匠、捉妾陵持、遂使望斷黃沙、悲連紫塞、
長辭赤縣、永別神州。

まことに画匠のために辱められ、遂に黄沙に望みを断たれ、悲しみは紫塞に連なり、長く中国に別れを告げ、神州と永別する事になってしまいました。と述べられているため、従来の画匠のプロットが変文においても展開されたことと推測される。『西京雜記』では、史実に画匠のプロットが加わって昭君が匈奴に嫁す理由が明確化されたが、変文では更に、匈奴に嫁した後の昭君と单于にまで話が及んでいる。史実は曲げられて、昭君は单于の子を産む事もなく病没し、单于の悲嘆に暮れる様子が描かれる。

変文におけるストーリー性の豊かさは絵解きという性格に負う所が大きいと考えられる。散文で物語の筋を語り、絵画を示しながら登場人物の心境をうたったと推測されるが、そこには紆余曲折した物語展開が要求される。また、下巻では昭君亡き後の服喪の様子や葬儀の有様も描かれており、異民族の風習にも及んでいる点、変文が成立した唐代の時代性が反映されているようで興味深い。変文における呼韓邪单于是、蛮族に対する偏見を超えて夫婦間の愛情をわきまえた立派な人物として描かれている。昭君を何とか楽しませようと歌楽や狩猟を催して細やかに気配りし、昭君が病気になるまで死期が近付くと、

公主時區僕亦死、誰能在後喪孤魂。
が後々まで孤魂を弔うだろうか。

と語りかける。昭君が身罷ると、喪に服して死者の側から離れず日夜悲しんで慟哭する。葬儀に際しては、
早知死若埋沙裏、悔不教君還帝鄉。

もつと早く、死んで沙漠に埋められると知っておれば、と昭君を帝郷に還らせなかつた事を悔やむ。

と昭君の願いを汲んでやれなかつた事を後悔する。死後数年経って、哀帝の使者として楊少微が弔問に訪れると、

乍可陣頭失却馬、那堪向老更亡妻！

むしろ陣頭にて馬を失つても、どうして年老いて更に妻を亡くすに堪えられようか！

と死後数年経てもなお癒されない悲しみを漢使に述べる。このように、変文においては匈奴に嫁いだ昭君が病死という悲劇的結末を迎えた後、更に残された单于の悲しみに焦点が当てられていく。そこには单于の昭君に対する深い愛情が存在している。ただし、单于の愛は最後まで報われない。昭君はあくまで政略結婚の犠牲者であり、身は匈奴にあつても心は常に漢に向かい、最後まで匈奴に順応する事なく、单于を愛する事なく世を去る。どれ程单于が昭君に愛情を注いでも彼女の心をつかむ事はできなかったのである。このような「王昭君変文」の人間関係について金文京氏は、单于から昭君への、また昭君から元帝への「片思いの文学」と述べているが¹²⁾、王昭君の悲しい運命だけでなく单于の悲嘆にまで触れている点、これまでの王昭君故事を一步発展させた作品として位置付ける事ができる。また、登場人物の感情を巧みに韻文に詠み込んでいる変文は、既存の簡単な話の記載の枠を脱して、より虚構の文学として潤色された作品であると言える。

敦煌変文には「王昭君変文」以外にも、「伍子胥変文」・「孟姜女変文」・「漢将王陵変」・「李陵変文」・「秋胡変文」など中国の歴史的故事に由来するものが存在するが、これらの故事は「王昭君変文」のように元雜劇として戯曲化されている¹³⁾。変文が敦煌を中心とする辺境地域でのみ普及していたのではなく、唐から五代にかけて中国北方で普遍的に行われていたとすると¹⁴⁾、それ

が宋・元代の諸宮調や元雜劇にも何らかの影響を及ぼしていたと考えられる。

4 「漢宮秋」劇の悲劇性

王昭君故事を題材とする元雜劇は『録鬼簿』には「漢宮秋」の他にも、関漢卿の「漢元帝哭昭君」・張時起の「昭君出塞」・吳昌齡の「月夜走昭君」が挙げられているが、これらは佚書である。

「漢宮秋」劇の刊本は『元曲選』・『古名家雜劇』・『顧曲齋刊本』・『醉江集』の四種が存在するが、これらは全て明代に編纂された刊本であり、元刊本は現存しない。元から明にかけての刊本改編の可能性も大いに有り得るため、元代当時の「漢宮秋」の様相を窺うには限界がある事は否めない。しかし、概して元刊本から明刊本の改編においては「楚昭王」劇や「趙氏孤兒」劇のように悲劇性が薄められて団円化する傾向がある。ゆえに「漢宮秋」において仮に刊本の改編があつたとしても、本来の元刊本はより悲劇色の濃いものであつたと考えられる。このような刊本の問題を踏まえつつ、本稿では『元曲選』を使用する^①。

「漢宮秋」は題目を「沉黑江明妃青塚恨」、正名を「破幽夢孤鴈漢宮秋」とする。全四折で正末は元帝である。まず劇の梗概を述べる。

匈奴の呼韓邪单于是漢との和平のために公主を求めようとする。元帝は先帝崩御の後、宮女が少なくなつて後宮が寂しくなつたため、毛延寿に命じて天下から美女を集め、その肖像画を描かせる事にする（楔子）。毛延寿はあまねく天下を巡つて百名の美女を選ぶ。その中の一人、成都秣歸県の百姓の娘王昭君は、家の貧困と自分の容姿を頼みにして毛延寿に賄賂を贈らず、醜く描かれた。そのため長らく帝の寵愛を得られなかつた。ある夜、昭

君が琵琶を弾いている所へ元帝が通りかかり、昭君を見初めて寵愛し、明妃に封じた。そして毛延寿を斬首するよう命ずる（第一折）。毛延寿は匈奴に逃れ、单于に昭君の絵姿を献上して、昭君は匈奴に行く事を願つたが漢王が手放さない、と偽りの奏上をして昭君を妃として薦める。单于是昭君の美しさに感嘆し、是非とも閼氏に迎えようとする。そして漢に昭君を求め、要求に応じなければ挙兵して侵略すると告げる。漢の大臣たちは单于の要請を受けるように奏上するが、元帝は大臣たちの不甲斐無さに憤りつつ反対する。昭君は国家のために自ら胡地へ赴く事を願ひ、元帝もやむなく許可する（第二折）。元帝は昭君を長安郊外の灞橋へ見送り、別離を嘆きつつ別れの杯を酌み交わす。昭君は漢の衣装を残し、迎えの使者に急ぎ立てられて旅立つ。昭君は单于に連れられて北上し、漢と匈奴の国境の黒龍江に至る。そこで江に身を投げて自殺する。单于是昭君を手厚く葬つて江のそばに葬り、青塚と名付ける。そして毛延寿を捕らえて漢に送り、再び漢と和を結ぶ事にする（第三折）。元帝は昭君を偲びつつ日々を過ごしていたが、ある日、匈奴から逃れて来た昭君が蕃兵に捕らえられる夢を見て驚いて目覚める。元帝は鴈の鳴く声を聞いて一層恫しさを募らせる。翌日匈奴の使者が毛延寿を送り、昭君の死を告げ知らせる。元帝は毛延寿を斬首して昭君の霊を弔う（第四折）。

「漢宮秋」の悲劇性を考えるに際してまず最初に着目したいのは、大団円の問題である。現存する元雜劇の多くが、紆余曲折のストーリー展開を経て最終的にはめでたしの大団円として幕を閉じる。これに対して「漢宮秋」では、悪役毛延寿が漢に送られて処刑され、昭君の霊は最後に慰霊されて一応の形式的な解決はなされるものの、昭君が故人となつた以上元帝と昭君の愛は永久に元に戻らず、完全な大団円劇としては終らない。明以降の王昭君

の戯曲には、昭君が死なずに団円に終わるような劇も作られているが^②、「漢宮秋」の作者馬致遠は悲劇的結末のまま幕を閉じる事をもつてよしとした。また、そのような結末が当時受け入れられたからこそ、無理に団円化される事なく名作の榮譽と共に『元曲選』の巻頭を飾つたのであろう。

それでは、「漢宮秋」劇を悲劇ならしめている要素について、以下に考察する。

①王昭君と元帝の悲恋

先行の王昭君故事では昭君と元帝の恋愛の設定は見受けられなかつたが、元雜劇ではそれが強く打ち出されている。「漢宮秋」の主題が二人の恋愛感情にあるという見解として、吉川幸次郎氏は、

つまり主人公元帝は、一種の極限情況にいる人物である。この極限情況にいる人物においても、恋愛感情は、毫も変化を見せぬことは、この感情の普遍さ真実さを、強調するものである。そこにこの劇の何よりの感動はあり、価値はがあると、私は考える。そうしてそれは恋愛の感情が人間永遠のものである限り、永遠に普遍的感動である。^③

と述べている。昭君の和蕃には漢と匈奴の平和維持という、個人の枠を超えた国家間の問題が絡んでくる。匈奴に嫁がねばならない悲惨な運命に加えて、愛する者との別離という試練によつて昭君の出塞にはより深い悲哀が伴う。第二折、匈奴へ嫁ぐ事を告げられた昭君は、

妾既蒙陛下厚恩。當効一死。以報陛下。妾情願和蕃。得息刀兵。亦可留名青史。但妾與陛下閨房之情。怎生拋捨也。

私は既に陛下の厚恩を受けております。まさに一死を尽くして陛下のご恩に報いるべきでございます。私は喜んで和蕃致しましょう。戦を止められる

ならば、歴史に名を留める事もできません。たゞ、私と陛下との閨房の情はどうして捨てられましようか。と言ひ、漢と匈奴の友好のための和蕃は承知するが元帝との別れは耐えられないと訴える。

第三折、昭君と元帝の別れの場面では〔雙調新水令〕・〔駐馬聽〕・〔步步嬌〕・〔落梅風〕・〔殿前歡〕・〔鴈兒落〕・〔得勝令〕・〔川撥棹〕・〔七弟兄〕・〔梅花酒〕・〔收江南〕・〔鴛鴦煞〕の全十二曲の歌を通して、昭君との別離を嘆く元帝の心情が切々とうたわれる。有名な〔梅花酒〕の歌を見てみよう。

呀。俺向着這迥野悲涼。草已添黃。色早迎霜。犬褪得毛蒼。人撈起纓鎗。馬負着行裝。車運着餼糧。打獵起圍場。他他他傷心辭漢王。我我我攜手上河梁。他部從入窮荒。我鑾輿返咸陽。返咸陽。過宮牆。過宮牆。遠迴廊。遠迴廊。近椒房。近椒房。月昏黃。月昏黃。夜生涼。夜生涼。泣寒蟬。泣寒蟬。綠紗窗。綠紗窗。不思量。

ああ！このうら寂しい原野に向えば、草は枯れ、兔の毛色は早くも白く変わり、犬は色あせて青黒い毛となった。人は房の付いた鎗を立て、馬は荷を負い、車は乾糧を運び、巻狩りが始まった。昭君は傷心にて私の許を辞し、私は手を携えて橋に上った。彼女の従者は荒涼たる地の果てに入り、私の車駕は咸陽に帰る。咸陽に帰りて宮牆を過ぎる。宮牆を過ぎて廻廊を廻る。廻廊を廻りて椒房に近づく。椒房に近付けば月薄暗く。月薄暗くして夜寒く。夜寒くして秋蟬泣く。秋蟬泣いて緑紗の窓。緑紗の窓にどうして彼女を思わずにおられようか。

同じく王昭君故事を題材にした戯曲でも、明の陳與郊の「昭君出塞」劇では、元帝との恋愛の設定はなく、『西京雜記』の流れを汲んだ内容になっている。元帝は昭君の出発の時に初めて対面してその美貌に驚き後悔するが

〔漢宮秋〕劇の悲劇性（伊藤実雪）

時既に遅く、やむなく昭君を家来に送らせて早々に退場する。「漢宮秋」第三折全体を通して別離の悲しみがうたわれ、別れを惜しんでいるのと比較すると、何とも味気ない出塞場面である。

第三折は劇のクライマックスの場面であるが、第四折では独り漢宮にて昭君を思いつつ侘しく過ごす元帝の心情がうたわれる。残された者の悲嘆を描いているという点で、第四折の元帝は「王昭君變文」の単于の立場と共通するものがあると言えよう。世の最高権力者であっても意のままにならぬ事があり、愛する者を失った悲しみは世間一般の人々と何ら変わる所はないのである。

第四折では〔中呂調粉蝶兒〕・〔醉春風〕・〔叫聲〕・〔別銀燈〕・〔蔓青菜〕・〔白鶴子〕・〔幺編〕・〔上小樓〕・〔幺編〕・〔滿庭芳〕・〔十二月〕・〔堯民歌〕・〔隨煞〕の全十三曲の曲の合間に鷹の鳴き声が五回挿入される演出が独特である。鷹は元帝の歌に呼応するかのように、また自己の存在を知らしめるかの如く頻繁に鳴く。鷹を元帝の悲しみの友とする解釈もあるが⁽¹⁸⁾、昭君の形代としての意味があるとも考えられる。古来より鷹は秋になると南へ飛び、春になると北に到り、妻が夫に従うのに喩えられる。また、『礼記』昏義第四十四によれば、婚礼の時に婿が嫁を迎えに行く際、嫁の家に鷹を贈って嫁を貰い受ける証としたという⁽¹⁹⁾。鷹は婚姻の際の重要な贈り物であった。「王明君詞」には「願わくは飛鴻の翼を假り、之に乗りて以て遐に征かん」という句があり、また、武帝の時に烏孫へ嫁した烏孫公主は「悲愁歌」〔古詩源〕卷二にて「願わくは黄鵠と為りて故郷に還らん」とうたっている⁽²⁰⁾。胡地へ嫁いだ女性たちは望郷の念を自由に空飛ぶ鳥に託している。昭君は自殺して、鷹に弧魂を委ねて元帝のもとに還つて来たものの、死んで肉体は無くなったため元帝に気付いても

らえない。今世においては永久に元帝に相見える事がで

きなくなった昭君の悲しみを鷹の声は代弁しているかのようである。

②王昭君の死と儒教的倫理の問題

第一折の登場場面で、昭君は以下のように自己紹介する。
妾身王嬙。小字昭君。成都秭婦人也。父親王長者。平生務農為業。母親生妾時。夢月光入懷。復墜于地。後來生下妾身。

私は王嬙、小字は昭君、成都秭婦の者です。父親の王長者は平生は農業を営んでおります。母親は私を生む時、月光が懐に入つてまた地に落ちるのを夢に見ました。その後、私を生みました。

これは昭君の運命を暗示する科白である。黒龍江にて死を迎える事は第二折〔賀新郎〕の曲中の「青塚」という言葉からも予見される。

俺又不曾徹青霄高蓋起摘星樓。不説他伊尹扶湯。則說那武王伐紂。有一朝身到黃泉後。若和他留侯留侯廝遭。你可也羞那不羞。您臥重衾食列鼎。乘肥馬衣輕裘。您須見舞春風嫩柳宮腰瘦。怎下的教他環珮影搖青塚月。琵琶聲斷黑江秋。

私は未だかつて青空を突き通して高く摘星樓を建てた事はないし、伊尹が湯を扶すと説いた事もない。ただかの武王が紂王を倒した事を説くのである。あの朝黄泉に到つた後に、もしかの留侯と遇うならば、汝は恥じるか恥じまいか。汝は褥を重ねて臥し、鼎を並べて食し、肥えた馬に乗り、軽やかな皮衣を纏う。汝は、春風に舞う昭君の瘦せた様を見るべきである。どうして彼女に、環珮の影が青塚の月に揺れ、琵琶の音が黒江の秋に絶えるような事をさせられようか。

昭君が自殺する設定は馬致遠の創作である。第三折の最後、漢と匈奴の国境に至つた昭君は、

漢朝皇帝。妾身今生已矣。尚待來世也。

漢の皇帝陛下、私の今世は終りです。來世をお待ち下さいませ。

と言って江に飛び込む。これは当然史実から外れており、先行の王昭君故事にも見られない展開である。単于の妻となつてから病死する「王昭君変文」とも異なり、元帝に対する操を死守している。死んでしまつては和蕃公主の使命は果たされないが、昭君の行為に感じ入つた単于は事の顛末を毛延寿の責任として漢と和親する。いささか性急な展開ではあるが、昭君の死によつて毛延寿は罰せられる事になり、こうして勸善懲惡の論理は貫かれる。勸善懲惡は中国古典劇の一種のテーゼであり、公案物のような元雜劇では最終的に悪者の姦計は暴かれ、一件落着して終る。

単于の妻となる前に自ら死を選んで操を守り元帝への愛を貫く昭君の行為の背景には、中国人の儒教倫理が大きく作用していると言えよう。中国人の倫理観と演劇との関係について、高橋繁樹氏は以下のように述べている。

中國にあつては、古典悲劇の主人公の行動は一般的にいってこのような儒教倫理に従順であり、それを疑つて否定したり、新たに人間普遍の眞理を提出することはほとんどなかつた。かれらは身にふりかかる不幸や災難にたちむかうにはたちむかうが、その善や正義の内容は、依然として傳統禮教である儒教倫理の域を出なかつた。⁽¹⁾

そして中国に本格的悲劇が少ない要因として中国の倫理観の問題を指摘している。王昭君は確かに儒教倫理に従順であり、それを頑なに貫いて死を選ぶ。儒教社会においては、妻たる者には貞操堅持・貞節実践が強固に要請され、操を汚すのは女性にとつて最大の恥辱と考えられていたが⁽²⁾、封建的礼教を遵守し、死という形で元帝への節を守り通す昭君の行動からは、運命に翻弄される

ばかりでない意思の強さが窺われる。そしてそれは、夫への貞操を守つて再婚せず冤罪によつて処刑された「寶娥冤」劇の寶娥にも相通するものがあると言えよう。

概して、元雜劇に描かれる女性主人公は、昭君や寶娥のように儒教倫理を遵守する傾向がある。彼女たちは悪者の姦計によつて不幸な境遇に陥るものの、断固として儒教倫理に従う道を選ぶ。時としてその選択が悲劇的結末を迎え、結果として死に至るような場合であっても決して妥協しない。ある意味では捨て身の自己犠牲的行為ではあるが、そのように頑ななまでに儒教倫理に従おうとする毅然とした態度、強固な精神性、そこに観る者に感動を与える要素が潜んでいるのではないだろうか。

5 おわりに

「漢宮秋」劇の悲劇性について本稿では、昭君と元帝の悲恋と、昭君の死と儒教的倫理の点から考察した。王昭君は結果的には悲しい運命を辿つて死に到るが、ある意味では、生命を賭して倫理道德を遵守した彼女の精神は当時の中国人（漢民族）の理想を体現するものであつたと言えよう。また、愛する者を永久に失つた悲しみに暮れる元帝の姿は、皇帝であっても愛別離苦から逃れる事はできないという眞諦を象徴するものである。それゆえに、元帝の嘆きの場面は一般大衆の大いに共感する所であつたと推測される。

元から明にかけて雜劇の改編が進む中で「漢宮秋」劇は無理に団円化される事なく悲劇的收場のまま残された代表的な戯曲である。元代における悲劇の様相を、我々は「漢宮秋」の中に垣間見る事ができるのである。

注

- (1) 拙稿「元雜劇における悲劇の存在——楚昭王」劇の改編を中心に——（『九州中國學會報』第三十六卷、平成十年）。
- (2) 和蕃公主は中国の異民族に対する政策で、宮廷の女性を異民族の長と結婚させるものである。尚、この政策を「和蕃公主」と称するようになったのは唐代以降である。
- (3) 王国維『宋元戲曲史』（太平書局、一九六四年）一〇六頁。
- (4) 王季思主編『中国十大古典悲劇集 上』（上海文艺出版社、一九八二年）九頁。
- (5) 王昭君故事と敦煌變文に関しては以下の文献を参考にした。川口久雄「敦煌變文の素材と日本文学——王昭君變文と我が国における王昭君説話」
- 『金沢大学法文部論集 文学篇』第十一号、昭和三十八年）
- 山田勝久「王昭君に於ける史実と虚構性の系譜について」
- 『語学文学』（北海道教育大学）二十七、一九八八年）
- 金岡照光『敦煌の文学』（大蔵出版、昭和四十六年）
- 金岡照光『敦煌の繪物語』（東方書店、一九八一年）
- 金岡照光『講座敦煌 九 敦煌の文学文献』（大東出版社、平成二年）
- 王重民『敦煌古籍叙録』（商務印書館、一九五八年）
- 林幹等篇『昭君与昭君墓』（内蒙古人民出版社、一九八七年）
- (6) 原文は、徐震堦選注『漢魏六朝小説選』（古典文学出版社、一九五七年）による。
- (7) 王汝濤編校『全唐小説 第一卷』（山東文艺出版社、一九九三年）参照。『周秦行記』では、薄太后が、牛僧孺の夜伽の相手として昭君を指名する。
- 太后謂王嬪曰：「昭君始嫁呼韓單于，復為殊累若單于婦，固自用。且苦寒地胡鬼何能為？昭君幸無辭。」
- (8) 王汝濤編校『全唐小説 第三卷』（山東文艺出版社、一九九三年）参照。『瑀玉集』は佚書であるが黎庶昌の『古逸叢書』に第十二卷・第十四卷の二巻のみ残っている。
- (9) 小川環樹『變文と講史——中國白話小説の起源——』（『日本中國學會報』第六、一九五四年）参照。
- (10) 金文京『王昭君變文』考（『中国文学報』第五十冊、平成七年）参照。
- (11) 原文は、王重民編『敦煌變文集 上集』（人民文学出版社、一九五七年）による。以下の引用も同じ。
- (12) 金文京、前掲論文参照。
- (13) 變文の題材となつた故事の戯曲化の例として、以下に『録鬼簿』の題名を挙げる。

- 〔漢將王陵変〕 ↓ 顧仲清「陵母伏劍」
 ↓ 周文質「持漢節蘇武還鄉」
 ↓ 高文秀「伍子胥棄子走樊城」
 ↓ 吳昌齡「浣花女抱石投江」
 ↓ 李壽卿「伍員吹簫」
 ↓ 鄭廷玉「孟姜女送寒衣」
- 『録鬼簿』は、「王国維校注本録鬼簿」（『宋元戲曲史』）所収を使用。
- (14) 中鉢雅量「敦煌変文の説唱者と聴衆」（『吉田敬一教授頌寿記念中国学論集』、汲古書院、一九九七年）によれば、敦煌変文の作品は北方や西北地方に舞台を設定する傾向があるという。
- (15) テクストは、臧晋叔編『元曲選 第一冊』（中華書局、一九七九年）を使用する。以下の引用も同じ。
- (16) 鄭慶歙／遊佐昇訳「中国伝統戯中の王昭君戯―民俗研究資料の一例―」（酒井忠夫・福井文雄・山田利明編『日本・中国の宗教文化の研究』、平河出版社、一九九一年）参照。
- (17) 吉川幸次郎『漢宮秋雜劇』の文学性（『吉川幸次郎全集 第十五卷』、筑摩書房、昭和四十四年、一九四頁）。波多野太郎氏は、異民族に対する深く強いレジスタンスを「漢宮秋」の中心的主題としている。波多野太郎「漢宮秋の主題について―中国小説戯曲史研究 五―」（『東方学』第九輯、昭和二十九年）参照。
- (18) 吉川幸次郎、前掲書。
- (19) 父親属子而命之迎、男先於女也。子承命以迎、主人筵几於廟、而拜迎於門外。婿執鴈入、揖讓升堂、再拜奠鴈、蓋親受之於父母也。（『礼記』昏義第四十四）
- (20) 烏孫公主とは、江都王劉建の娘細君の事。武帝は烏孫王昆莫の要請に依じて元封六年（前一〇五）細君を公主として烏孫へ嫁がせた。
- (21) 高橋繁樹「中國古典悲劇に關する比較演劇的考察」（『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』、汲古書院、一九九一年、十四頁）。
- (22) 下見隆雄『孝と母性のメカニズム―中国女性史の視座』（研文出版、一九九七年）参照。